

2020年9月27日 佐土原教会礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書 12 章 9～19 節

説教題：神は望みを置かれる

学生時代の話です。友達数名とタクシーを待っていました。私達の前には子供の手を引いたお母さんが並んでいました。ずんだれた格好の私達を見て警戒されたのでしょうか、お母さんは「私達が先に並んでいたのだから、順番をちゃんと守りなさいよ」というような目で私達を睨んでおられました。しばらくしてタクシーが2台続けてやって来ました。前の車は見るからに古い車で、後ろの車は新型の車でした。途端にそのお母さんが私達の方を向いて、ニッコリ笑って「先にどうぞ」と言われて、自分達はさっさと後ろの新型の車に乗られました。「エーッ」と驚いたのですが、どうしようもなく、先に来た古い方のタクシーに乗って帰ったのを覚えています。でも、そういう私がまた色々な場面で同じことをしているのだと思います。宗教改革者ルターは言いました。「人間は、あらゆることにおいて自分の利益を求める」。これが人間の悲しい姿ではないでしょうか。しかし「ヨハネ 3 章 16 節」は「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(ヨハネ 3:16)と語ります。神が愛された「世」というのは、そういう人間が生きている「世」なのです。

今日の箇所は「イエス様のエルサレム入城」を記します。私達はこの記事から、神の愛と恵みを学ぶことができます。2つのことを申し上げます。

1：神が私達を受け入れて下さる恵み

「過越しの祭り」の時期です。エルサレムに入城されるイエス様の周りには、大勢の人がいました。イエス様がラザロをよみがえらせたベタニヤからイエス様と一緒に来て来た人々もいたでしょう。その人々は「ラザロのよみがえり」を見て興奮しています。また、ラザロの話聞いて「そんな凄い人がエルサレムにやって来るのか」、そう言ってエルサレムから迎えに出て来た人々もいたでしょう。こちら側の波とあちら側の波が合流して物凄い騒ぎになったのではないのでしょうか。その人々の多くは「過越しの祭り」参加するため、エルサレムに来ていた人々だったと思います。

人々は、棕櫚の木の枝を取ってイエス様を迎えました。棕櫚の枝で迎えるというのは、王を迎える時にすることです。そして讃美しました。「ホサナ、祝福あれ。主の御名によって来られる方に。イスラエルの王に」(13)。「詩篇 118 篇」、勝利と喜びを表す言葉です。イエスの時代から 150 年前、当時ギリシャの支配にあったイスラエルを解放し、しばらくの独立国を打ち立てたユダ・マカバイという人を、人々がエルサレムに迎える時に歌ったものだと言われます。民族意識が高揚する「過越しの祭り」の時、人々は、ラザロをよみがえらせたイエスに興奮して、イエスを、ローマを打ち破り、イスラエルの栄光を取り戻してくれる人物として迎えたのです。

その中で、イエスはどうされたのでしょうか。興奮している群衆に「私はあなた方が考えているような者ではない」と言ってみても、このうねりは止められないでしょう。それでイエスは「ロバの子に乗る」という方法で、ご自分がどういう者であることを示されたのです。ロバの子に乗ることには、2つの意味がありました。1つは、イエスの入城が「旧約」の預言の成就だと

いうことを示しました。「旧約」のゼカリヤは言いました。「シオンの娘よ。大いに喜べ…見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方はろばに乗られる。それも、雌ろばの子のろばに」（ゼカリヤ 9:9）。ゼカリヤは「やがてやって来る『救い主(王)』は、ロバの子に乗ってエルサレムにやって来る」と預言していたのです。だからイエス様の行動は、「私こそ預言された救い主である」と示すことになりました。しかしもう1つは、イエス様はロバに乗ることによって—(王も、平和なことのためには、馬ではなくロバに乗ったのです)—「私は戦いのためではなく、平和のために来た」ということを無言のうちに宣言することになったのです。

では「イエスが平和のために来られた」とは、どういうことでしょうか。「平和」とは、ヘブル語で「神が共におられる」ということです。「あなたに平和があるように」と言うのは「神があなたと共におられるように」という意味です。私達にとっての平和とは、神が共におられるということではないでしょうか。どんなことがあっても、そこに神が共にいて下さるなら、私達はそこで神の平和に支えられる経験をするのです。神から来る希望によって立てるのです。問題は「どうやってその『平和』を持つことが出来るのか」ということです。そこに十字架があるのです。「イザヤ書」にこうあります。「主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ」（イザヤ 59:1～2）。申し上げたように、私達は、本来罪の者です。元日銀総裁の「速水優」という方がこう言っておられます。「仕事柄、世界中の国の要職にある人と話をしなければならなかった。でもその時『この人もイエス様の救いを必要としている罪人なのだ』と思う時、臆せず話をすることが出来た」。どんなに立派に見える人でも、神の目から見たら裁かれるべき罪人なのです。全く善である神様は、汚れた私達と、本来一緒にいることは出来ない、逆に言うと、私達は神様と共にいることは出来ない、その意味で「平和」のない者なのです。しかしイエス様が、私達の罪を引き受けて、十字架で始末して下さったので、私と神の仕切りが取り除かれ、私達は神に近づくことが出来る者になったのです。

しかしそういうことは、この時の群衆も、そして弟子達も分からなかったのです。群衆は、ラザロのよみがえりの奇跡に興奮してイエス様を迎えているのです。しかし、群衆はこの後どうするのか。イエス様は5日後には十字架に架かれます。その時、恐らく群衆の多くは「イエスを十字架につけろ」と叫ぶのです。イエス様もそのことをご存知でした。しかしイエス様は、ここで「お前達は、もうすぐ私を裏切るのではないか。何を白々しいことを言っているのか。お前達の歓迎なんか、受けることは出来ない」とは言われたいのです。群衆の歓迎を喜んで受けられたのです。

私はここに神の愛の深さを感じます。私達の信仰も、上がった、下がった、本来持っている自己中心に振り回される信仰だと思うのです。神様に心から感謝したかと思うと、しばらくすると、神に喧えている、不信仰の言葉を並べている、そういうことはないでしょうか。逆もあります。不信仰の道を歩いている時に、神様の恵みを経験して、神様にお詫びして、神様を見上げ直すこともあります。要するに、この群衆のように極端でなくても、私達も、不安定な信仰生活をしていると思うのです。しかし、その私達の信仰を、イエス様は、神様は、受け入れて下さるのです。不安定な私達の信仰を、神様は喜んで受け止め、受け入れて下さるので

す。つまり、何度でも、私達を信頼し、私達に望みを置かれるのです。神様がそんな方だから、私達の信仰生活、神様との恵みの生活は、続いて行くのです。神様は、何と忍耐強い、憐れみ深い、愛情深い方なのか、私達は、この個所からそのことを教えられ、感謝するのです。

2：私達が主イエスを王として迎える恵み

神は私達をいつも迎えて下さる、と申し上げました。2 番目に申し上げたいことは、私達もイエス様を迎えたい、王として迎えたい、そこに祝福があるということです。申し上げたように、イエスはロバの子に乗ることによって「私こそ預言された救い主である」と主張されましたが、「福音書」を読むと、人々は、イエスの進まれる前に上着を脱いで道に敷き、棕櫚の枝を切って来て道に敷きました。それは王を迎える時にすることです。また人々は「ホサナ…イスラエルの王に」(13)と叫びました。人々は、イエス様を「王」として迎えたのです。そして、その歓迎を、イエス様は「良し」として受けられたのです。ここまで目立たないように活動して来られたイエス様が、初めて「王」になろうとしておられるのです。この箇所はそのことを伝え、ここを読む私達にも「イエス様を『王』としてお迎えするように」と語るのです。

『王』として迎える」とはどういうことでしょうか。「王」というのは現実的な意味での支配者です。だからそれは、実生活から離れた、頭だけの神ということではない、現実の生活の中で見上げるべき存在だということです。昨年 11 月に来て下さった佐藤彰先生は、原発事故で、雪の中、教会員と大変な流浪の旅をしておられる最中にこう言っておられます。「今の状況は正直に言えば苦しみです。でも聖書に『試練を喜べ』と書いてある。だから、確かに本音の部分では苦しいけど、でも信仰を働かせて喜ぶ方を選びとって行きましょう。主が喜べる状況を与えて下さいます」(佐藤彰)。イエス様を「王」として迎えるとは、色々なことが起こるこの生きる現実の中で「王」なるイエスに信頼し、自分の本音を裏切るようにしてでも「王」なるイエスへの信頼、イエスの言葉への信頼に生きようとするのではないのでしょうか。そして、そのようにイエス様に向かった時にこそ、イエス様への信仰が生き方に関わるものになるのです。

繰り返しますが、イエスはここでご自分を「王」として主張されました。「王」とは、その意志によって世界を治める存在です。しかもイエスは「私は『神の平和を実現する王』である」と主張されました。その方は、十字架で死なれたけれども、しかし復活して、今も生きて世を支配しておられるのです。その方が私達に「私があなたの王である」と言われる。この箇所は「そのイエスをあなたの王として迎えなさい」と語る。私達はそのメッセージに応え、この方を「王」として迎える時、私達は「私達にどんなに辛いことがあっても、どんなに苦しいことがあっても、『お先真っ暗だ』と思えるようなことがあったとしても、この世を支配し、私の人生を支配しているのは、私ではない、誰か他の人の力でもない、運命でもない、私を愛するが故に十字架を負って下さった『王』であり、その『王』が死から甦り、今も生きて、私に神の平和を実現して下さる」という希望を持つことが出来るのではないのでしょうか。さらに言えば、15 節は「ゼカリヤ書」とは違い、「恐れるな。シオンの娘…」(15)と始まります。このことは象徴的です。「福音書」を書いたヨハネの生涯にも、初代教会のクリスチャン達にも、恐れがあったのです。私達にとっても、人生の最大の敵は「恐れ」ではないのでしょうか。私達は、いつも何かを恐れて生きているのではないのでしょうか。「自分の人生はどうかなってしまう

のではないか」というような恐れもあると思うのです。そして、その先には、やがて死を迎えなければならない、という恐れもあります。その意味で、イエス様を「王」としてお迎えするという事は、「恐れるな」という声を聞き続けることが出来るということでもあると思います。先が見えない、恐れのある人生だからこそ、「恐れるな」と言って下さるイエス様をお迎えする必要があるのです。いずれにしても、イエス様を「王」としてお迎えするところに、神の恵みを経験する秘訣があるのです。

そして、「恐れるな」という声は、死を越えて聞くことが出来るのです。ここで人々は棕櫚の枝を振ってイエス様の前に立ちました。同じ光景が「ヨハネ黙示録」にあるのです。「見よ。あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数えきれぬほどの大ぜいの群衆が、白い衣を着、しゅろの枝を手に持って、御座と小羊との前に立っていた」(黙示録 7:9)。人生の苦しみを経た人々が天で喜んでいる様子です。イエス様を「王」とする人生の恵みは、死を越えて続いて行くのです。ある女性がある牧師に電話して来ました。「私は、癌のため、あと3か月の命だと言われました。どうしたらよいのでしょうか」。牧師は答えました。「イエス様を信じて、死に対する解決を得てください。私も3度の手術を受けましたが、死に対する恐れを感じたことはありません。あなたもイエス様を信じて下さい」。牧師は、神の救いについて話をしました。間もなく、女性から手紙が届きました。「あの日は、思いがけず、イエス様を信じる祈りをさせて下さり、ここまで救って下さいましたことを感謝しております。あと3か月のいのちと言われた時には、本当にショックでしたが、今はとても冷静というか、平穩というか、もう神様のみこころのままにと思っています。イエス様のおかげで…世の中全部が温かく感じ…素直な自分に気づいておりますで…」。「王」なるイエスは、死においても私達を導いて下さるのです。

3: 終わりに

2つのことを申し上げました。「神はこんな私達を迎えて下さる」「イエス様を王としてお迎えするところに恵みがある」、そのことを確認して、新しい1週を歩いて行きましょう。